【講演会等報告】

文化とランドスケープデザイン研究会の紹介 第二報

片桐　尉晶（保昭）

はじめに

文化とランドスケープデザイン研究会（以下、研究会と呼ぶ）は文化人類学の方法や知見をランドスケープデザイン実務に応用する方法を探るための研究会である。参加者は人類学研究者とランドスケープデザイナーが半分ずつであり、ネット上でのみ研究発表を行っている。手探り状態で始まったこの研究会も一年が過ぎ、文化とランドスケープデザインの実務相互間にある問題が明らかになってきた。これをもとに文化とランドスケープデザイン研究会は新たな段階へと進もうとしている。

本稿は2021年度に始まり『北海道民族学』No.18.での筆者の報告（片桐 2022）に続き、2022年の研究会とその成果について報告したい。

2022年の研究会

前回の報告以降の研究会プログラムは以下の通りであった。

表：文化とランドスケープデザイン研究会のこれまでの発表

研究会開催日時	発表者（所属）	発表テーマ
2021 年 11 月 30 日（火）	佐々木史郎（国立アイヌ民族博物館）	博物館展示とランドスケープデザイン
2022 年 1 月 13 日（月）	瀬川桂子（rashisaの庭）	人と植物で育て合う健やかな社会と未来
2022 年 4 月 13 日（水）	新海拓郎（総合研究大学院）	大和郡山の景観と金魚の養殖
2022 年 6 月 23 日（木）	片桐尉晶（風土計画舎）	デザインの発想と文化人類学

昨年に報告したものは省略して、各報告を見ると、佐々木の研究報告は先住民に関する展示という一種のランドスケープを組み立てていく際の苦労や戸惑い。瀬川の研究報告はランドスケープデザインの中でも植栽を通して目指される、文化というよりも、より広く生物全般に通底する表現について、新海の研究報告は地域の斜陽産業を「まちづくり」に応用する自治体の紆余曲折、片桐の研究発表は、最近注目されつつある情動をランドスケープデザインに取り入れることについてである。

これらに続いて 2022 年の 7 月 28 日、8 月 30 日、9 月 27 日、11 月 1 日、12 月 1 日の 5 回にわたり小一時間ほど、自由討論を行った。これらの討論ではまちづくり団体の旗揚げや、遺棄された屋外施設の紹介、また景観の再現、復元についてなどの議論がなされた。

なぜ研究発表ではなく自由討論なのかというと、研究発表だけではデザインにどう文化人類学の知見を反映させるのか、決め手になる研究がなかったということもあり、各人の研究を知

った上で感じたことを、お互いに出し合うのがよいと思われたからである。

見えてきたこと

前回の報告では文化人類学をランドスケープデザインに応用する際の有用性として、筆者は「思いがけない形態へのヒントを提供できる」「計画設計プロセスにおける多数の調停」の 2 点を挙げた。また問題点として「調査に時間がかかる上に有用性がわかりにくい」「倫理的優位性の表明」を挙げた。

研究会の討論を通してこれらの有用性と問題点は、テキストによる理解をめざす文化人類学畑の者と、あくまでデザインをめざすデザイナーとのちがいを改めて感じさせることになった。

文化人類学系の研究は、地域住民同士やその外側の人々の相互のせめぎあいの中から生み出されてゆく何かがあり、それが作り出される過程を、なんとかモノづくり、風景づくりの技術的な過程に取り入れさせようという模索である。

これに対しランドスケープデザイン畑の者は、人類学に対し、教科書や事例集ではわからない無意識的な美的あるいは機能的なデザインの隠れた基準を明らかにする手っ取り早い術として文化人類学に期待する。人類学畑の人間にわかりやすくいえば、地域文化や社会を表す象徴物の発見を文化人類学に期待している。

これは近代科学技術を駆使した表現行為にたいし疑問の目を向けられはじめた19世紀にはじまり21世紀の現在にいたるまで、デザインの根本問題として現在でも解決されていない（たとえばラスキン（1997）、アレグザンダー（1978）、ツムトア（2014）など）。

目標の違い

いわば、人類学畑の者は理解を獲得することが最終目的なのだが、ランドスケープデザインは新しい提案が最終目的なのである。

しかしテキストが獲得できてもそれが確実にデザインに結びつくかはわからない。テキスト化された新しい社会理解と新しい形作りは必ずしも結びつくとは限らない。というより結びつかない場合の方が多い。これはランドスケープデザインへの応用という点で人類学者集団とランドスケープデザイナー集団が先験的に思い描いていること（相互の社会集団の「ハビトゥス」）が異なっており、これは人類学的にも明確化されておらず、デザイン実践を通して新たに明示的、暗示的な規範を構築していくほかないといえよう。

ランドスケープデザイナーからの文化

この研究会においては、良いデザインとは文化が反映されたデザインであろう。

ランドスケープデザイナーが文化に期待するのは、風景に反映されるであろう、何らかの秩序であり、どの世界の技術者に対しても簡潔に記述できるはずのものである。

例えば吉本哲郎が提唱する「地元学」（吉本 2008）のように、地域の人々が共感するような景観的な情報、画像や音声などを写真やイラストとテキストを組み合わせたモノグラフを蓄積するというやり方もあろう（人類学でも問題となる撮り方、録り方が訴えてくるものごとについても研究会では話しあわれていることを断っておく）。

ランドスケープデザイナーにとって作らねばならないのはランドスケープデザインそのものであり、その背後にある「隠れた次元」のテキストではない。風景の中にテキスト化できない、

言語も理解も超越した秩序なり文化なりが感覚として予見されれば、それは、世界で唯一無二のその地域だけの文化なのであり、それこそが良いランドスケープなのである。

人類学研究者社会からの文化

一方、人類学のランドスケープデザイン研究は新しい社会理解が求められ、それは一言でいいきれるような甘いものではない。長期のフィードや人類学研究に積み重ねられる知見は、人類学研究者集団の社会ではパッと見て感覚されて終わりのものではない。

おわりに

インゴルド風にいえば、人類学者にとってエスノグラフィは唯一無二の作品ともいえる。だとするとランドスケープデザイナーにとっては、上にあげたようなランドスケープデザインが唯一無二の作品なのである。ランドスケープデザインについてのおびただしいテキストは、すべてこの非テキストであるモノのデザインを補助してくれる情報として期待される。

では感覚として予見されるものとはどういう情報で、どうやって取り出すのか。文化研究も行うデザイナーとしての筆者の個人的意見を書かせていただく。人類学的な理解よりも、風景の中に現れては見えがくれする、あるいは予見される情報をいかに捉えるか、そのデータの集め方を人類学が得意なフィールド調査を使ってどう明らかにするかが問われるだろう。

テキスト情報や理解、あるいは理解よりも深いところで作る行為に作用するやりかたが研究会を通じて獲得できれば思う。

今後の予定

今後は実際のランドスケープ作業を研究会で行いつつ、その経験を積み重ねることによって上の課題を含め新たな方法が開かれていくであろう。デザイン実践を通して新たに明示的、暗示的な規範を構築するのだ。実際のランドスケープデザインとしては、研究会の酒井氏が関わっている北海道の放棄された公園地のまちづくり活動に参加、参与していく方向である。

次回の研究会は2023年3月7日に予定しており、フィールド調査の準備やスケジュールについて話し合う。

ご興味を持たれた方はメールアドレスKGD02626@nifty.ne.jp（片桐）までご連絡をお願いしたい。参加のご希望はもちろん大歓迎です。また些細な疑問にもお答えします。

謝辞

本稿をまとめるにあたって毎回の研究会に参加いただいている設計家、計画家、研究者、大学院生の皆さまにはここで感謝の意を表したい。どうもありがとうございます。

引用文献

アレグザンダー・クリストファー
1997　稲葉武司（訳）『形態の合成に関するノート』鹿島出版会、東京.
片桐尉晶（保昭）
2022　「文化とランドスケープデザイン研究会の紹介」『北海道民族学』18: 74-77.
ツムトア・ペーター
2015　鈴木仁子（訳）『空気感：アトモスフェア』みすず書房、東京.

吉本哲郎
　2008　『地元学をはじめよう』岩波書店、東京.
ラスキン・ジョン
　1997　高橋栄川（訳）『建築の七灯』岩波書店、東京.

（かたぎり・やすあき／（有）風土計画舎）

【講演会等報告】

第36回北方民族文化シンポジウム網走
「北方諸民族文化とジェンダー」

中 田　篤

開　催　日：2022年10月15日（土）・16日（日）
開 催 方 法：対面・オンライン方式の併用
会　　場：オホーツク文化・交流センター（エコーセンター2000）大会議室
主　　催：一般財団法人北方文化振興協会・北海道立北方民族博物館
後　　援：網走市、網走市教育委員会、北海道民族学会、北海道考古学会、北海道博物館協会

当学会が継続的に後援している「北方民族文化シンポジウム網走」は、今年で36回目を迎え、3年ぶりに対面方式でも実施された。今回は、北方諸民族文化における伝統的なジェンダーの在り方やその歴史的変遷、現状と課題を検討することがテーマとして掲げられ、ドイツからの2名を含む8名の研究者が参加した。また座長として、岸上伸啓氏（国立民族学博物館）、当学会会員の甲地利恵氏（北海道博物館）にも参加いただき、二日間にわたって研究報告と討論が行われた（表）。本稿では、このシンポジウムの概要を紹介したい。

第1部「ジェンダー研究の歴史と展開」

第1部では、ジェンダーやセクシュアリティ研究の歴史、またそれらに対する先住民文化研究の影響について発表と討論が行われた。

最初に宇田川妙子氏（国立民族学博物館）は「フェミニズム、ジェンダー研究とインターセクショナリティ：「女性」概念をめぐって」と題し、文化人類学の立場から、フェミニズムやジェンダー研究の変遷と現在の課題について報告した。また、インターセクショナリティ（複合差別）という概念の適用により、ジェンダーだけでなく、人種、民族、階級などのさまざまな差異が複雑に絡み合っていることを指摘した。

続いて佐藤円氏（大妻女子大学比較文化学部）は「北米先住民研究におけるジェンダーとセクシュアリティ」と題し、北アメリカ先住民の歴史研究におけるジェンダーやセクシュアリティの問題を取り上げ、植民地化以前・以降の北米先住民社会におけるジェンダーやセクシュアリティの多様性とその変化、現在の状況について紹介した。

第2部「北アメリカの事例」

第2部は岸上伸啓氏（国立民族学博物館）に座長をお務めいただき、北アメリカ先住民社会のジェンダーの問題に関し、カナダ・ケベック州、ユーコン準州の事例が報告された。

矢内琴江氏（長崎大学ダイバーシティ推進センター）は、「カナダの先住民族女性たちの現在（いま）」と題し、寄宿学校における先住民の子どもに対する迫害、現在のカナダにおける先住民女性の抑圧的状況について、ジェンダーと植民地支配の観点から報告するとともに、先住民女性ら自身による状況改善に向けた取り組みについて紹介した。

また、当学会会員の山口未花子氏（北海道大学大学院文学研究院）は、「生きる技術としての「メディシン」—ユーコン先住民の超自然的な実践におけるジェンダー」と題し、ユーコン準州の先住民社会における超自然的な実践について、先住民社会における生業活動や社会関係の変化に伴うジェンダー役割の変化について報告した。

表 ： 第36回北方民族文化シンポジウム網走プログラム

10/15（土）		10/16（日）	
08:30	受付	08:30	受付
09:00	開会式	09:00	第3部：アイヌの事例 「アイヌのジェンダーを再考する」 北原 モコットゥナシ（北海道大学） 「アイヌ・アートの現在 —創造と享受をジェンダーの視点から考える」 池田 忍（千葉大学） 座長：甲地 利恵（北海道博物館）
09:20	第1部：ジェンダー研究の歴史と展開 「フェミニズム、ジェンダー研究とインターセクショナリティ：「女性」概念をめぐって」 宇田川 妙子（国立民族学博物館） 「北米先住民研究におけるジェンダーとセクシュアリティ」 佐藤 円（大妻女子大学） 座長：中田 篤（北海道立北方民族博物館）	11:30	昼食
12:00	昼食	12:30	第4部：シベリアの事例 「カモフラージュの色はいくつ？—ロシアの資源豊富な開発地域における男性性と超男性性の規範と思想」 J. O. ハベック（ハンブルク大学） 「歪んだ鏡のなかで—シベリア先住民における非異性愛規範的なジェンダーとセクシュアリティの形態の民族誌的表象」 S. デュデック（タルトゥ大学） 座長：呉人 惠（北海道立北方民族博物館）
13:00	第 2 部：北アメリカの事例 「カナダの先住民族女性たちの現在（いま）」 矢内 琴江（長崎大学） 「生きる技術としての「メディシン」—ユーコン先住民の超自然的な実践におけるジェンダー」 山口 未花子（北海道大学） 座長：岸上 伸啓（国立民族学博物館）	15:10	総合討論
		15:50	閉会式
16:00	北方民族博物館視察		

第3部「アイヌの事例」

2日目午前中の第3部では、甲地利恵氏に座長をお務めいただき、アイヌ文化におけるジェンダーの問題が報告された。

まず、当学会会員の北原モコットゥナシ氏（北海道大学アイヌ・先住民研究センター）が「アイヌのジェンダーを再考する」というテーマで報告した。北原氏は、現在のアイヌが日本社会における人権意識の浸透やフェミニズムの波を経験しているにも関わらず、伝統的とされる文化にはセクシズムがみられることを指摘し、こうしたアイヌの「伝統的」なジェンダー規範が、日本の近代化の際に流入した西欧文化の影響によって強化された可能性について言及した。

続いて池田忍氏（千葉大学大学院人文科学研究院）は、「アイヌ・アートの現在—創造と

享受をジェンダーの視点から考える」と題し、現代の「アイヌ・アート」の表現者とその作品や活動内容を紹介しつつ、ジェンダーや民族など、さまざまな属性の関係性のなかで表現されるアイヌの造形活動について紹介した。

第4部「シベリアの事例」

最後の第4部では、シベリア地域の先住民社会におけるジェンダーの問題が取り上げられた。

まず、ヨアヒム・オットー・ハベック氏（ハンブルク大学民族学研究所）は、「カモフラージュの色はいくつ？―ロシアの資源豊富な開発地域における男性性と超男性性の規範と思想」と題し、ロシアでは、厳しい環境で暮らす北方先住民が「伝統的に」強い男性性を持つとされていることを示した。また、北方先住民の多くがカモフラージュ柄の衣服を身に着けていることに関し、生業活動上の実用的な意味だけでなく、求められるジェンダー規範とは異なる感情を隠すための戦略である可能性について示唆した。

続いてステファン・デュデック氏（タルトゥ大学 北極研究センター）は、「歪んだ鏡のなかで―シベリア先住民における非異性愛規範的なジェンダーとセクシュアリティの形態の民族誌的表象」と題し、過去の民族誌で描かれてきたシベリア先住民のジェンダーをたどり、異性愛規範から外れた生き方の解釈が、研究者の置かれた社会的・政治的・ジェンダー的な立場を反映させた「歪んだ鏡」となっていることを指摘した。

全4部の報告終了後、総合討論がおこなわれ、各参加者から報告の補足やコメントが示された。特にジェンダーやフェミニズムの問題を専門としてきた研究者と北方民族文化の研究者がこのテーマをとおして出会い、お互いに新たな刺激を受けることができたことが大きな収穫だったと感じた。

また、本シンポジウムは、対面式とオンライン式の併用で開催された。会場では質疑や討論が盛り上がり、同じ場所で報告者と質問者が直接受け答えするという形式の重要性や魅力を再確認することとなった。一方、会場から離れた道内や国内各地、そして国外からも気軽に参加できるオンライン式の利便性も改めて感じた。ただし、運営側としては両方の参加者に別々に注意を払わねばならない状況となり、進行上大きな問題にはならなかったものの、併用の難しさや課題についても思い知らされた。会場、オンラインを合わせ、今回のシンポジウムには 2 日間でのべ 161 名の参加者があった。

（なかだ・あつし／北海道立北方民族博物館）

【展示紹介】

函館市北方民族資料館 企画展示

「北のシルクロードと蝦夷錦―炭素 14 年代測定で明かされた蝦夷錦の制作年代」

中 村　和 之

函館市北方民族資料館は、2022 年 7 月 22 日（金）から 11 月 18 日（金）まで、企画展示「北のシルクロードと蝦夷錦―炭素 14 年代測定で明かされた蝦夷錦の制作年代」を開催した。小論では、その企画展示の内容について紹介し、これまでの展示との相違点について私見をのべたいと思う。

企画展示で展示されているのは、下記の資料である。資料名の後に「*」が付いているのは、写真パネルが展示されていることを示す。この企画展示では、市立函館博物館が所蔵する資料を展示することを原則としているため、外部の機関が所蔵する資料は写真を展示している。「:」の L は資料の長さを、W は幅を示している。さらに「;」後の数字は、市立函館博物館の資料番号を示す。同館の所蔵品でないものは、資料番号を記載しない。

① 蝦夷錦 1879年旧開拓使函館仮博物場に寄贈された資料　杉浦嘉七旧蔵 :L142 W218 ;700044
② 蝦夷錦* 1879年旧開拓使函館仮博物場に寄贈された資料　杉浦嘉七旧蔵 :L138 W203 ;700045
③ 蝦夷錦 旧伊達林右衛門家旧蔵　夏用　児玉コレクション :L142 W210 ;K-H13-0352
④ 蝦夷錦 旧伊達林右衛門家旧蔵　冬用　児玉コレクション :L127 W171 ;K-H13-0353
⑤ 蝦夷錦 児玉コレクション（寄託） :L71 W400　－
⑥ 蝦夷錦打敷 :L147 W194 ;700043
　裏面に「安政二卯年七月廿九日寂 智精道範居士 俗名 綱嶋長藏良久」等の墨書あり
⑦ 蝦夷錦打敷 :L64 W68 ;H26-0093
　裏面に「安政三丙辰三月 綱屋長藏良久」の墨書あり
⑧ 陣羽織 背面蝦夷錦　児玉コレクション :L98 W70 ;K-H13-0355
⑨ 蝦夷絵 紙本着色 巻子本 小玉貞良 表装蝦夷錦 児玉コレクション :L29 W1373 ;K-H13-0446
⑩ 蝦夷風俗図 紙本着色 巻子本 蝦夷絵の写本　児玉コレクション :L27 W1339 ;K-H13-0445
⑪ 「重建永寧寺記」拓本　紙本　軸装　1924年函館図書館受入品 :L126 W70 ;H14-0087
　原石には1433年（宣徳8）の年号あり
⑫ 「勅修奴児干永寧寺記」拓本* 紙本　軸装　1924年函館図書館受入品 :L120 W48 ;H19-0001
　原石には1413年（永楽11）の年号あり
⑬ 蝦夷錦袱紗* 江差町教育委員会蔵
⑭ ニブフの帽子と錦の切れ端* サハリン州立郷土誌博物館蔵
⑮ 蝦夷錦の涎掛け*　松本家旧蔵 写真提供：松前町教育委員会

つぎに、館内の展示風景を紹介する。この企画展示は、常設展示の展示替えの際に展示の構成を変更することによって実施している。そのため、常設展示に割り込むような形になっており、規模には制限がある。なお写真は、木戸忍氏（函館市北方民族資料館・館長）の撮影による。

以上が今回の企画展示の概要である。つぎに、これまでの蝦夷錦を主題とする展示を振り返り、今回の企画展示の特徴について私見を述べたい。

北海道で、蝦夷錦がある程度知られるようになったのは、『北海道新聞』日曜版の連載記事「蝦夷錦の来た道―北のシルクロード」がきっかけである。この記事は、1990 年 10 月 7 日（日）から 1991 年 6 月 30 日（日）まで、38 回にわたって連載された。連載終了後に『蝦夷錦の来た道』としてまとめられ、出版された（北海道新聞社 1991）。

この連載記事に前後して、1990 年度から 1994 年度まで 5 ヵ年計画の「北の歴史・文化交流研究事業」が実施された。その報告書（北海道開拓記念館 1995）の巻頭に置かれた館長・城戸崎彰氏の「ごあいさつ」によれば、「この事業は、（北海道開拓記念館と、筆者追記）中国黒竜江省文物管理委員会（黒竜江省博物館）、ロシア共和国ハバロフスク州郷土博物館、サハリン州郷土博物館並びにウラジオストク市のロシア科学アカデミー極東支部極東諸民族歴史・考古・民族学研究所と提携して、中国東北地方～アムール川流域～サハリン～北海道を結ぶ古代から近世に至る壮大な民族交流の道を探ることを目的とし、『オホーツク文化』と『山丹交易』を主要課題としておりますが、地方博物館の海外学術交流事業としても注目されてきました」と記されている。このようにマスコミと研究機関がほぼ同時に蝦夷錦や山丹交易に注目することになった背景には、おそらくこの当時の社会的な状況があったのではないかと筆者は考えている。

『北海道新聞』の連載記事の後半の時期に、札幌市中央図書館 1 階の特別展示室で、新館開設記念特別展「北のシルクロード・ 蝦夷錦の来た道」が開催された。これは札幌市中央図書館と北海道新聞社の共催による催しである。小規模なものではあったが、おそらくこれが蝦夷錦を主題とする最

初の展示であったと思われる。この展示では、『北海道新聞』の連載記事がきっかけとなって、新たに確認された資料が紹介された。その後、北海道開拓記念館（現在は北海道博物館）や青森県立郷土館が特別展を開催した。以下にその名称と開催の日程、および刊行された図録をあげる。

1. 札幌市中央図書館新館開設記念特別展「北のシルクロード・ 蝦夷錦の来た道」1991 年 3 月 15 日（金）～6 月 16 日（日）（中村 1991）
2. 北海道開拓記念館「第 42 回特別展 山丹交易と蝦夷錦」1996 年 6 月 1 日（土）～7 月 28 日（日）（北海道開拓記念館 1996）
3. 青森県立郷土館「開館 30 周年記念特別展 蝦夷錦と北方交易」2003 年 9 月 26 日（金）～ 11 月 3 日（日）（青森県立郷土館 2003、2004）

北海道開拓記念館の特別展は、「北の歴史・文化交流研究事業」による調査・研究の成果を展示したものといえ、蝦夷錦については初めての本格的な展示である。つぎに青森県立郷土館での展示は、青森県の資料を紹介した点で、それまでの展示では知られていなかった資料を多く紹介した点が特徴である。この間、青森県の佐井村で蝦夷錦が見つかるなど、新しい資料の紹介があり（田中 1992）、さらに青森県史の資料調査によって、新たな資料の存在が確認された。青森県立郷土館での展示では、それらの資料が紹介された。なお、2001 年 9 月 20 日（木）から 2002 年 1 月 15 日（火）の間に、国立民族学博物館で開催された特別展「ラッコとガラス玉－北太平洋の先住民交易」のように、もっと広い視野から蝦夷錦を取りあげた展示もある（大塚 2001）。これらも当然取りあげられるべきであるが、本稿では蝦夷錦を主題としたものに限って紹介している。

今回の企画展示は、炭素 14 年代測定つまり放射性炭素年代測定という理化学的な分析手法を取り入れた研究成果を展示したところに特徴がある（小田・中村 2018）。筆者が研究代表者を務めた科学研究費の基盤研究（C）「蝦夷錦の制作年代と流通に関する研究」（17500694）、およびそれ以降の研究成果が基礎となっている。一連の研究の結果、サハリン島（旧称は樺太）の北西岸のルポロヴォで 1966 年に採集されたニブフの帽子に付けられていた錦の切れ端から、14 世紀から 15 世紀初頭の年代を得ることができた。これは、モンゴル帝国／元朝のサハリン島への侵攻、および明朝の永楽帝の時期に行われたアムール川下流域のヌルゲン／ヌルガン（奴児干）都司の設置などの史料の記載とも符号する。モンゴル帝国／元朝や明朝が行なっていた朝貢交易の証拠ともいえる資料である。このように、文理融合型の研究成果を公開できたことが、今回の企画展示の特徴である。

なおこの企画展示に関連する行事として、2022 年 8 月 6 日（土）に小田寛貴氏（名古屋大学宇宙地球環境研究所・助教）を講師にお迎えして、令和 4 年度　函館市北方民族資料館特別企画「炭素 14 で探る歴史時代―蝦夷錦・古文書・鉄の年代測定―」が同館で開催された。

最後に、今回の企画展示に関係したのは、小田寛貴氏、奥野進氏（市立函館博物館・学芸員）、木戸忍氏、山田早紀氏（函館市北方民族資料館・学芸員）および筆者の計 5 名である。市立函館博物館および函館市北方民族資料館の職員と、館外の研究者が協力体制を組んで、企画展示を企画し開催したことを付記して結びとする。

引用文献

青森県立郷土館（編）
2003　『開館 30 周年記念特別展「蝦夷錦と北方交易」』 青森県立郷土館、青森.
青森県立郷土館（編）
2004　『開館 30 周年記念特別展「蝦夷錦と北方交易」改訂版』 青森県立郷土館、青森.
大塚和義（編）
2001　『ラッコとガラス玉―北太平洋の先住民交易』国立民族学博物館、大阪.
小田寛貴、中村和之
2018　「加速器質量分析法による蝦夷錦の放射性炭素年代測定―『北東アジアのシルクロード』の起源を求めて―」『考古学と自然科学』75: 41-58.
田中忠三郎（監修）
1992　『図録 本州北限の博物館 佐井村海峡ミュウジアム』佐井村海峡ミュウジアム、佐井.
中村和之（監修）
1991　『札幌市中央図書館新館開設記念特別展「北のシルクロード・ 蝦夷錦の来た道」図録』札幌市中央図書館、札幌.
北海道開拓記念館（編）
1995　『「北の歴史・文化交流研究事業」研究報告』北海道開拓記念館、札幌.
1996　『第 42 回特別展図録「山丹交易と蝦夷錦」』北海道開拓記念館、札幌.
北海道新聞社（編）
1991　『蝦夷錦の来た道』北海道新聞社、札幌.

謝辞

本研究は、JSPS 科研費 JP20H01306 の助成を受けたものです。

（なかむら・かずゆき／函館大学）